少女時代

玉木　もとか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女時代

【Ｎコード】
Ｎ１８１０Ｚ

【作者名】
玉木　もとか

【あらすじ】
西垣優花のお話である。
小学生、中学生と成長していく過程での、西垣優花の心が描かれている作品です。

プロローグ　もしも出会ってなかったら　（前書き）

このお話は実話です。
あまり、文章を書くのが上手ではありませんので、そこの所ご理解いただけるようお願いいたします。
アドバイス、感想、コメント等ありましたら、是非お願いします！
では、お楽しみください。

プロローグ　もしも出会ってなかったら

プロローグ　もしも出会ってなかったら

もしも私は彼女と出会っていなかったらどうなっていたのだろうかとたまに考える。

もしかしたら、今よりずっと良い人生だったかもしれない。
もしかしたら、今よりずっと悪い人生だったかもしれない。

分からない。

それが私の結論だ。

もし、私が彼女に出会っていなかったとしても私は恐らく同じ壁にぶつかっていたと思う。
でも、それを思い知るのはもっと遅い時期だったかもしれないし、そんなにも大きな壁だったなんて気付きもしなかっただろう。

ただ、壁が見えるだけ。

それで終わっていたと思う。

私は彼女と出会って、変わった。
変わった事が良かったのか、悪かったのか。

それさえも分からない――――

第一章　出会い（前書き）

すみません。
前の更新のときに言い忘れていたのですが、このお話は小さいまとまりごとに更新していきます。
よろしくお願いします！

第一章　出会い

第一章　出会い

「皆さん。新しい仲間が増えます。名前は西垣優花さん」
「よろしくお願いします」
私は小さく頭を下げる。

私の家庭では転勤が多い。父の会社による都合のためだ。いわゆる転勤族である。
幼稚園のときは小学校に入る前に一度転勤をし、新しい地での小学校生活は僅か一年しかなかった。
その免疫があってか、別れが悲しい事も無かった。それは長くいられなかった事もあっただろうが。
これも免疫があってか、新しい地に来て新しい学校生活に不安は抱かなかった。
そして、小学校二年生となった今、また新たに転校をしたのだ。

そこは、全校生徒が９００人前後と大きな学校だった。
創立１００年となり、古い校舎なのだが、補強工事がしてあり、災害に対しては安全である。
私は担任の先生に連れられ、二年一組の教室に入る。
そのときの第一声が、「うわっ。こいつ小せぇ～」だった。
それを言ったのはクラスで一番大きい男の子である。
「小さい」と言われた事なんて何回もあるので、むっともしない。
その男の子とは十センチ以上は絶対に背の差があったと思う。私は小学校二年生の頃は百十五センチ程しかなかったのだから。
その日のうちになんとなくクラスのこの質問に答え、和気藹々とクラスに馴染めた。

そして、担任の先生に、
「今日はどうだった？クラスの皆とは仲良くなれそうかしら？」
と言う。
担任の先生は小太りで、優しいふいんきを持つ先生だった。その担任の先生が私が帰る直前に呼び止め、声をかけたのだ。
私はなんと答えていいのかも分からず、
「はい。仲良くしていく事ができそうです」
と曖昧に答える。
担任の先生は「そう」と短く答え、微笑む。
こうして私の転校初日の学校生活は終了した。

そして二日目。
転校初日には欠席していた少女が学校に来ていた。
そして、毎日行われる健康観察のときが来た。
その健康観察は出席番号と名前、今日の体調を言うのだ。私の場合、「出席番号三十四番西垣優香」となる。
それは普通の人にとっては造作もないことだが、初日に欠席していた少女には大変な事だった。
「はい。出席番号は？」
担任の先生は毎日の事なのだろうか、少女に優しく近づく。
「出席番号……五番」
それは今にも消え入りそうな声である。
私は辛うじて少女と席が近かったため、聞こえたが教室の隅々まで聞こえるような声では決して無い。
「それじゃあ、名前は？」
「大野……紗枝」
それは本当にか細い声でこちらまで不安になってくる。
私は大野紗枝をひそかに応援した。
実際に声を出して応援している人もいるが、私には大抵そんな事は出来ないだろうと思う。

クラスの何人かはこのやり取りをうっとおしいと思っていたのだろうか、とずいぶん経ってからこのやり取りを思い出すとそう思った。私はそのときはとても素直で、人に裏表なんて無いと思っていた。

「元気ですか？」

「げ……元気です」

その声はあまり元気じゃないような声にも聞こえるが、これが地なのだろうと直感的に思う。

「はいっ。よくできました」

先生は軽く少女の肩をたたく。

そして、大野紗枝の健康観察が住んだ後はだいぶスムーズに進み、私も最後に健康観察を終える。

その後、先生は大野紗枝が今日健康観察ができた事を褒め、朝の会を終えた。

大野紗枝という少女は、大人しく控えめのようである。

あまりクラスの子と話はしていなかった。話しかけられたら、今にも消え入りどうな声で短く会話のやり取りをしているようである。

私は少し緊張しながらも大野紗枝に声をかけにいった。

「私、昨日転校してきた、西垣優香。宜しくね」

大野紗枝は少しの間、目を瞬く。そして、はっとしたようにあわてて答える。

「よ……よろしくね」

「ねぇ。貴方の事、なんて呼べばいい？」

「……何でもいいよ」

少し戸惑ったように間を空け、答える。

「それじゃあ、紗枝ちゃんでいい？私のことはなんて呼んでくれてもいいから」

私は仲の良い子でも決して呼び捨てにはしない性分だった。そのため、この少女に対しても“ちゃん”付けである。

「それじゃあ……優香ちゃんでいい？」

「うん。いいよ」
私はなんとなく彼女とうち溶け合えたような気がした。

第二章　生まれて初めての友達との喧嘩

第二章　生まれて初めての友達との喧嘩

そして、私は紗枝ちゃんとかなり仲良くなっていった。
私は紗枝ちゃんとときを過ごすのは好きで仕方が無かった。紗枝ちゃんは、私が思っていたよりは明るい子で、普通に話せるようにはなっていた。
今思うと、紗枝ちゃんから見て私はうっとおしい女だと思っていたんじゃないかと思う。自分の話ばかりで、相手の話を聞く事もしていたが、そのくだらない話に一方的に話を着き合わせていたんじゃないか、と。
当時の私はそんな事を考えもせず、紗枝ちゃんと接していた。
私は習い事などもしていたため、あまり紗枝ちゃんと遊ぶ機械は多い方ではなかったが、私にしては紗枝ちゃんと過ごす時間は他の者と比べればかなり多かった。
そして、ある日、紗枝ちゃんの家に遊びに行った。
それは紗枝ちゃんと過ごすようになってからしばらくした時の事で、紗枝ちゃんと遊ぶ事が日課にもなっていた。
その日は復旧しつつある携帯ゲーム機を持って遊びに出かけた。
「うわぁ。色々なソフトを持ってるんだね」
「……うん。ちょっと言ったら買ってもらえるんだ」
三十個ほどのゲームソフトがケースに入っており、どれも新鮮味あふれる物ばかりだった。
「……いいなぁ。家では誕生日とかしか買ってもらえなくて、誕生日の日ですら買ってもらえないこともあるんだよ」
「えっ！そうなの？可哀想。ねぇ、このゲームはやった事あるの？これ、通信プレイが出来るんだ。やってみない？」
一つのゲームソフトを指差しており、そのゲームはコマーシャル

なので最近発売された物だ。
「うん。やるやる」
私はそのゲームは気になっていて、それがやれるのならばと思い喜んでその話に乗った。
本人のゲームソフトと言うだけあって、紗枝ちゃんはゲームをするのはうまかった。
だが、私はゲームをするのは頭を使う物意外はあまり得意ではなく、私は明らかに紗枝ちゃんよりも技術で劣っていた。
そこで、少しだけ悪口を言ってしまった。
「いつものアイテムばっかり使うんだね」
それは悪口というより嫌味に近かったかもしれない。
それにむっとしたのか、
「優香ちゃんだって、使おうとしてるじゃん」
しばらく無言になって、私は紗枝ちゃんにまた何か言う。
そして、紗枝ちゃんも私に何か言う。
私はさほど苛立ってはいなかった。だが、悪口を言っているうちにそれが当たり前になっていって悪口を言ってしまっていた。
そして、紗枝ちゃんもそれに応じて返答する。
それの繰り返しだった。
それを繰り返して、その間ですら苛立ちを持たなかった私は、帰りのチャイムがなっている事に気づく。
「あっ！そろそろ時間だ。帰らなくちゃ」
私は断りをいれずに通信していたゲーム機の電源を切る。
紗枝ちゃんは自分のゲーム機の電源を切り、ソファーに放り投げる。
二階にいた私達は一階へ降りていく。
私は何の前触れも無く、気ままに降りていく。だが、紗枝ちゃんの足取りは妙に遅かった事は覚えている。
「じゃあね」
私は玄関に行き、そう言って軽く紗枝ちゃんに手を振る。

いつもは「じゃあね」というような軽い挨拶をくれるのだが、その返事は無くて、紗枝ちゃんはただ手を振っているかどうかも分からないほど曖昧に小さく手を上げただけだった。
今思うと、私はまったくと言ってもいいほど怒ってはいなかったが、紗枝ちゃんはそれなりにおこっていたのではないかと、いまさらながらに思う。

紗枝ちゃんと口げんかをしてから次の日。
私は紗枝ちゃんに会い、
「おはよう」
と言う。
紗枝ちゃんは一瞬驚いたように目を大きく見開いたのを良く覚えている。
「おはよう」
その声は耳の良い私にもあまり聞こえないようなぐらいの声だったが、私には「おはよう」と聞き取れた。
生まれてはじめての友達との喧嘩はあまりにも軽い物で、始まりも終わりも分からないような喧嘩だった。
喧嘩と呼んでいいのかさえ分からない。
これが、紗枝ちゃんとの喧嘩で、最初で最後の紗枝ちゃんとの喧嘩だった。
当時、こういうことで謝る事の無かった私は、本気で謝るほどの喧嘩ではないと思っていたのか、それを私は思い出せなかった。

第三章　出来なかった事―？

第三章　出来なかった事

私は小学二年生の冬。十二月頃の事。
私は年間行事でその当時、一番嫌いな行事のある日だった。
それは持久走大会だった。
私は決して運動神経の良い方ではない。そして、持久力も無い。
そのため、毎年行事にあるような運動会や持久走大会が嫌でいやで仕方が無かった。
転校してきた学校では朝の時間と言う物が設けられており、その時間では読書をする。たまに、ボランティアの読み聞かせもあり、私はその時間が好きだった。
だが、十一月の下旬になると、その時間は運動場を走ると言う物に変わる。
それは、私にとって悪夢のような物だった。
そのため、十一月の下旬から十二月の中旬は、私にとってあまりいい年ではない。
私は当時も今も真面目な生徒だったため、やるからには精一杯頑張ってはいた。

そして、そんなある日。
私は紗枝ちゃんの走りを見て驚いた。
紗枝ちゃんは内気の割りに、運動神経はかなり良かった。
私は走り終わった紗枝ちゃんに急いで駆け寄る。
「す、すごいね。紗枝ちゃんは！」
走り終えた紗枝ちゃんの順位はなんと、一位だった。
私は後ろから数えた方が早いぐらいの位置にいる。
「えへへ。私が得意なのって運動ぐらいしかないから」

紗枝ちゃんは小さく照れ笑いをする。
「本当にすごいね。本番も頑張ってよ！」
「うん」
そして、紗枝ちゃんは本番でも二位との差をつけて一位になった。

そして、私達は小学校三年生になった。
それまでの時間はあっという間に過ぎていった。
今回の持久走大会でも、紗枝ちゃんは一位を取った。二位との差をつけて。
だが、それは紗枝ちゃんの最後の持久走大会の一位だった。

そして、三年生を無事に終え、私達は四年生となる。
四年生となったとき、ある事件は唐突に起きた。
私は小学校の事を思い出しても大まかな事しか覚えていない。それだけ、記憶も薄れ、覚えるほどの事ではなかったのか、と今では思う。
だが、私はこの事件を忘れる事は一生無いだろうと思う。

その事件は突然舞い降りる。
四年生の十一月の上旬。そろそろ持久走の練習が始まる頃である。
「ねぇ、紗枝ちゃん」
「な、何」
紗枝ちゃんに声をかけたのは、吉田亜佐美ちゃんだった。
紗枝ちゃんは陸上教室に通っていて、その吉田亜佐美ちゃんも陸上教室に通っているのだと紗枝ちゃんから聞いた事がある。
「あのさぁ、今度市の大会があるじゃん？」
「うん」
紗枝ちゃんは何か怯えながら頷いている。
私はその場で、紗枝ちゃんは何を怯えているのだろう、と思う。
いつもは普通に話しているのだ。

紗枝ちゃんの亜佐美ちゃんにたいする態度が変わったのはつい最近である。
何があったんだろう？
「それでさぁ……。その市の大会か、学校の持久走大会。どっちかさぁ、一番をあきらめてよ。それで、私に一番を頂戴」
はぁ？
私は思わず眉をひそめる。
頼んでるにしては態度でかすぎないか！？それに、そんなことしたら八百長じゃん。
「……」
紗枝ちゃんはそれを聞いて困ったように顔をゆがめている。
「ねぇ。それじゃあさ、考えておいてよ」
私は亜佐美ちゃんに対して疑念を積もらせたが、私は何も言えなかった。
私がじっと麻美ちゃんのほうを見ているが本人は気付かない。
「ねぇ。話の続き、何だっけ？」
「あ、そうそう――」
私は麻美ちゃんのせいで切り上げられていた、話に戻した。

私が亜佐美ちゃんが紗枝ちゃんに八百長をしろといっているのを知ってからも、飽きることなく何度も言って来ていた。
私は亜佐美ちゃんに何かいおうと思ったが、何もいうことが出来ずにいた。
それは、「お前に何が分かるんだ」みたいな事を言われたら何もいえないような気がしたのだ。
そして、何もいうことが出来ずにいて、そのまま何の進展も無くそれを繰り返した。そして、私は何かいわなかった事を後悔する事になる。

あれ。今日は着てないのかな？

持久走大会の一週間前。紗枝ちゃんは学校を休んだ。
私は風邪かな、と思って、その日は仕方が無くいつもはしない読書をした。
そして、次の日も。また次の日も紗枝ちゃんは休んだ。
大丈夫かなぁ……。あと少しで持久走大会なのに……。
今日も着てない……。
私は紗枝ちゃんのいない空いた席を見つめた。
すると、先生がなぜか暗い顔をして入ってきた。
いつもは明るくて元気な先生なのに……、どうしたんだろう。
「今日はお知らせがあります」
先生はいつもよりワントーン低い声で話し始める。
「朝の会ではなく、一時間目の総合のときに話そうと思います。それでは朝の会を始めましょう」
少し先生は元の口調に戻し、朝の会を始めた。
私は先生が何故あんなにも深刻な顔をしているのか。心のどこかで分かっていたのかもしれないが、私にははっきりと分かっていなかった。
そして、朝の会が終わり、気に掛かりながらも私は読書を始めた。
しばらくすると、一時間目の始めのチャイムが鳴り、先生が入ってくる。
そして、挨拶をし、みんなが席に着いた。
「それでは……お話をしますね」
先生は一度そこで言葉を切り、クラス全体を見渡す。
「現在、紗枝算は学校をお休みしていますね。前までは風邪だと言っていましたが、本当は風では無いんです」
え？
クラスでざわめきが広がる。
だが、先生が注意するとそれはすぐに納まった。
そして、私はそれを聞いて先生の顔をより一層真剣に見る。
「今日は亜佐美さんも学校を休んでいますよね？」

私はさっと亜佐美ちゃんの席を見る。そこにはいつも元気にいる麻美ちゃんの姿は無い。

もしかして……

「知っている人もいるかもしれませんが、亜佐美さんは紗枝さんに市の大会か持久走大会の一位をあきらめてくれ、と言っていたそうです」

それが原因……？

「それで、亜佐美さんは責任を取るためにも、明日の持久走大会には出場しないそうです」

私はそれを聞いて何故か腹がたった。

紗枝ちゃんは運動神経がよくて、いつも徒競走や持久走で一番をとっていた。それがすごいと思って、紗枝ちゃんを褒めていた。

確かに亜佐美ちゃんは紗枝ちゃんがいたからいつも二番だったのかもしれない。だけど、亜佐美ちゃんがやったのはいけない事だと思う。

それで、結局紗枝ちゃんにとって償いになったのかというとそうでもないと思う。紗枝ちゃんなら市の大会のほうも出ないと思うから。

第一、亜佐美ちゃんは紗枝ちゃんに直接謝って無いんじゃないかと私は思う。

大丈夫かなぁ、紗枝ちゃん……

第三章　出来なかった事―？（後書き）

今回は一つの章が長いので、二つに分けます。
更新をお楽しみに。

第三章　出来なかった事―？

「ただいま～」
「お帰りなさい」
私は一時間目からずっと上の空で、いつの間にか家に帰宅してしまっていた。
母と上の空のまま適当に会話し、自分の部屋に行く。
そして、自分でも名を書いたかも分からない宿題を終え、すぐに時間は経っていった。
「お～い。お姉ちゃん。ご飯だよ～」
妹の声がし、はっとする。
時計を見ると六時半になっていた。
言われた通りに食卓へと向かい、ご飯を食べ始める。
「ねぇ、お母さん」
「なぁに？」
母は端を動かしながら聞く。
「紗枝ちゃん、風邪じゃなかったんだって」
「やっぱり」
母は予想をしていたと言うように平然と答えた。
私は母に一時間目の事を話す。
「ふぅん。でも、本当にそれだけなのかな？」
「何が」
こうしているとき妹は話に入ってこないから助かる。妹は何か食べているときは大事な事が無い限り、何も話さないのだ。
「いやぁ。ただの勘なんだけどね。それ以外の理由に何かあるんじゃないのかな、って。何か心当たりは無いの？」
私は考えてみて、思い当たる節が一つだけあった。だが、
「……特に無いなぁ」
私はそれを母に言わない。

何か言われるような気がして怖かったのだ。自分のしていることについて何か言われるのは嫌いだ。
「ご馳走様」
母が思いついたかのように言う。
「宿題やったの？」
「うん」
適当にやった、何て事は言わない方が良いだろうと悟り、私は自分の部屋に戻った。

理由。
私はそれに対して一つ思い当たる事があった。
毎年、夏には水泳があった。
私達は四年生だ。四年生は水泳で変化が起こる年である。
小学校三年生までは、膝丈ぐらいしかない水が入っている小さなプールで水泳の授業行うのである。しかし、四年生になると、二十五メートルの大きなプールとなる。一番深いところでは百四十五センチの背が無いと立つ事は出来ない。
だが、当時の私は百四十五センチがあるかないかで、足がつくかどうかも微妙なところである。
さらに、私は泳ぐ事がお世辞にも上手とは言えなかった為、おぼれてしまいそうになったことが一回だけあった。
それは私のことなので置いておくとしよう。
私と違い、紗枝ちゃんは水泳も出来る。おまけに、背も高いので足をついたとしてもおぼれる心配など皆無だ。その証拠に、紗枝ちゃんは二十五メートルのプールを楽に泳いでいた。
話は少し変わるが、水泳のプールのある場所と私達の教室は近くない。校舎一つ分は離れている。そのため、移動をしなければならない。
そして、その移動時間の時には紗枝ちゃんの周りには自然と人が集まっていた。私はそれを紗枝ちゃんを賞賛するためだろうと思って

いたし、それ自体は別に悪くわないと思っていた。そのため、私と紗枝ちゃんが一緒に行こうと約束をしていても、一緒に行けることは少なかった。
そのうち、移動教室の時には紗枝ちゃんと距離を置こうとするようになった。
それは水泳以外のときでも続いた。
私は水泳の移動教室以降、距離があるように感じた。
その距離はいつまで経っても埋まる事は無く、逆に段々とはなれていくような気がしてならなかった。
それでも、私は休み時間に紗枝ちゃんと話したり、紗枝ちゃんと遊んだりもした。

そして、私が紗枝ちゃんとの心の距離を感じながらも話していた頃。
「でさ、妹が――――」
「うん」
「――とか言ってさ、生意気……というか、憎たらしいんだけど」
私は意気込んで拳を握り締める。
「うん」
紗枝ちゃんは私の話を聞いていても、無表情であいまいに頷くだけ。
「で、どうなったの」
しばらく紗枝ちゃんの顔を見ていて考えていたため、話の途中で黙った私を紗枝ちゃんは少しだけ見る。
「あれ？何を話していたっけ」
「忘れたの？妹の話だよ」
「……あ、そうか。それで――」
私は話しに戻り、二人で笑った。
私は笑いながら考える。
嗚呼。もしかしたら、紗枝ちゃんはこんなにもつまらない話しを聞いていたんだな。

それに、よくよく思い出すと私が一方的に話していただけのようで、紗枝ちゃんは何も話していないような気がする――――
私はそれを思うと自然に目を伏せていた。

嗚呼……。もしも、紗枝ちゃんが学校にこれなくなった理由に、私の思った事が入っていたら――――？
私はそれを思うと頭を抱えた。
「おーい。優花、お風呂～」
「お姉ちゃん。お風呂だって」
私は妹の声だけが辛うじて聞こえた。
「お――――」
「はいよー」
妹の声を途中でさえぎり、私はタンスから着替えを取り出し、風呂場へと向かった。

風呂から出た私はぽかぽかと温まった体になっていた。
そうしたら、すぐに眠気が襲ってきた。
いつもは風呂に入ってからは、逆に眠気が醒めるのだが、今日は違った。
頭が疲れていたからだろうか。
今日はもう寝よう……
私は大きな欠伸を漏らし、いつもよりも早めに寝床に着いた。

そして、持久走大会当日。
亜佐美ちゃんは学校には来なかった。
もちろん、紗枝ちゃんも来ない。
私にとっての持久走大会はつまらない物に変わった。
つまらない。
それが私の感情。

持久走大会が終わり、席に着く。
私はなんとなくクラスを見渡した。
私は紗枝ちゃんがもうこのクラスに戻ってこないような気がした。
クラスの皆は、楽しそうに何か話している。
私は他の人と関わろうともしなかった。
ああ。如何してこんな事になってしまったのだろうか――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1810z/

少女時代

2011年12月11日10時53分発行